

おばあちゃんのボンジーア

1 年前、私の家の隣に、派遣会社の事務所ができました。事務所の所長さんや事務員さんは、日系ブラジル人など外国籍の方です。私のおばあちゃんは、

「言葉も通じるかわからんし、なんか心配やなあ。ようわからん外国語で、大声で話をされたら、静かだった町内が騒がしくなると違うかな。」

などと不安がっていました。

ある日、ごみ集積所にポルトガル語の包装紙の入っているごみが、収集日ではないのに出されていました。おばあちゃんは、

「やっぱり、外国の人は、まともにごみも出せへん。こんな簡単なルールが守れんとは、迷惑なこっちゃ。」と言いました。それを聞いて私は思わず、

「おばあちゃん、そんなこと言うけれど、ごみの出し方がわからなかったのかも知れへんで。」と言いましたが、おばあちゃんの思いは変わりません。

翌日、自治会の役員さんが事務所に説明に行かれました。事務所の人によれば、役場からのポルトガル語のごみ収集カレンダーに従ってごみを出したけど、遅い時間に出してしまって、回収されず残ってしまったということでした。

私が、「やっぱり、おばあちゃんの思い込みやで。」と言っても、おばあちゃんは、「まあ、これからは時間を守って、ちゃんとやってもらおう。」と言うだけでした。

それから、しばらくたった暑い日のことです。畑仕事をしているおばあちゃんが、軽い熱中症で、動けなくなってしまいました。通りかかる人もなく、おばあちゃんはずいぶん長い間うずくまったままだったそうです。

その時、事務所の人が気づいてくれ、町内の人を呼んで一緒に介抱してくれました。幸い、救急車もすぐに来て、おばあちゃんは無事助かりました。

退院後、おばあちゃんと私は事務所にお礼に行きました。

「助けていただいて、ありがとうございます。」とおばあちゃんは恥ずかしそうにお礼を言いました。所長さんは、

「いいんですよ。困っている人を助けるのは、当然のことですから。私こそ、日本のルールや習慣がわからず、ご迷惑をかけていることもあるかもしれません。これからも、いろいろ教えてくださいね。」と笑顔で話されました。

その日から、おばあちゃんは、事務所の方と天気のことや畑仕事のことなど、いろいろ気楽に話すようになりました。そのうちに、ポルトガル語を教わったり、畑で育てた野菜をお裾分けしたり、ブラジルのお菓子をいただいたりするようになっていきました。おばあちゃんは、

「あんたが言うとおりの、私の思い込みがあったわ。お互いにじっくり話したら、習慣や言葉は違うけど、やさしい気持ちが伝わってくるのがわかるわ。この年になって、あらためて教えられたわ。」としみじみと私に話してくれました。

「ボンジーア（おはよう）。いい天気やね。」今日も、畑仕事をしながら、おばあちゃんのあいさつをかわす元気な声が聞こえます。